

環境デザイン教育に関する国際教育プログラムの構築と実施方法に関する研究

STUDY ON INTERNATIONAL EDUCATION PROGRAM IN ENVIRONMENTAL DESIGN

.....

佐々木 宏幸 デザイン学部環境・建築デザイン学科 特別准教授
 川北 健雄 デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
 岡村 光浩 デザイン教育研究センター 准教授
 鎌田 誠史 国立有明工業高等専門学校 建築学科 准教授

Hiroyuki SASAKI Department of Environmental Design, School of Design, Special Associate Professor
 Takeo KAWAKITA Department of Environmental Design, School of Design, Professor
 Mitsuhiro OKAMURA Center for Design Studies, Associate Professor
 Seishi KAMATA Department of Architecture, Ariake National College of Technology, Associate Professor

.....

要旨

本研究では、2011年1月に本学で1週間にわたり実施された、アムステルダム在住の本学の吉良森子客員教授によるワークショップ「吉良森子と都市を考える」の実施経験をもとに、その準備・実施・フォローアップの経緯を概観するとともに、環境デザイン分野における国際教育プログラムの構築や実施方法に関して考察し、以下の4点に要約した。

- ① ワークショップにおける課題設定の重要性
- ② 詳細な講評を通して一人の建築家の視点を学ぶ重要性
- ③ 国際教育プログラムにおけるインターネット活用の可能性
- ④ グループワークへの参加の仕方を学ぶ重要性

今後も、本ワークショップの実施を通して得た経験を生かし、海外の教育機関等との協力による海外での国際教育プログラムの実施方法とともに、日本国内で実施する国際的教育プログラムの構築方法について探究してゆくつもりである。

Summary

This study examines the implementation method of international education program in environmental design through our experience of the preparation for, implementation of and follow-up on “Exploring Urban Design with Moriko Kira”, the intensive workshop held at Kobe Design University in January 2011, and summarizes as follows:

- ① Selecting a proper project for a design workshop is essential for success.
- ② Learning the perspective of one architect through thorough design review is significant.
- ③ Utilizing the internet for communication in international education has great potential.
- ④ Learning how to act in group work is important.

We will make the most of the experience that we have gained through this workshop and explore the way to implement international education program in environmental design in Japan as well as in foreign countries through the collaboration with institutions in the world.

1) 目的

近年の環境問題の深刻化に伴う持続可能な社会実現の必要性、グローバルな都市問題と地域固有の都市問題解決のための多角的な視点育成の必要性、日本国内における建築マーケットの縮小とアジアにおけるマーケットの拡大などにより、日本において複合的・多角的視点からグローバルな環境デザイン教育を実施することが不可欠となっている。本研究では、2011年1月に本学で開催されたワークショップ、「吉良森子と都市を考える」の実践を通して得た経験をもとに、環境デザイン教育における国際教育プログラムの構築と実施方法に関する考察を行う。

2) 「吉良森子と都市を考える」の概要

「吉良森子と都市を考える」は、本学の環境・建築デザイン学科の客員教授であり、オランダのアムステルダムを中心に世界で活躍する建築家、吉良森子教授が、本学教員とともに企画・立案した短期集中型のワークショップである。本ワークショップは、本学の大学院生と学部生、計27名^{*1)}が参加し、2011年1月6日から12日まで1週間にわたり、本学の環境・建築デザイン学科棟において実施された。

ワークショップの課題は「Our Lord in the Attic - アムステルダムの歴史的市街地にある博物館のエクステンション」。昨年、ユネスコの世界遺産に認定されたアムステルダムの歴史的市街地、その中心にある「屋根裏教会」博物館の機能を、路地を挟んだ向かい側に建つ既存建物の改修、あるいは建て替えを通して拡張する計画の提案である。



図1) 2010年11月現在改装中の「屋根裏教会」博物館の内部



図2) 「屋根裏教会」博物館（手前）と計画対象地に建つ既存建物（路地を挟んだ奥）

3) 「吉良森子と都市を考える」の実施方法

「吉良森子と都市を考える」の実施は、4段階のプロセスで行われた。第1段階は、吉良教授との事前打合せを通じた課題の決定、第2段階は、ワークショップ実施に先立って行われた、吉良教授による課題出題と関連情報の提供、第3段階は7日間にわたるワークショップの実施、第4段階はワークショップ後の参加学生による提案シートの作成である。

まず、第1段階では、吉良教授と本学教員とのEメールでのやり取り、および吉良教授と筆者によるアムステルダムの吉良事務所での打ち合わせを通して課題内容を決定した。吉良事務所での打ち合わせでは、吉良教授から示された2つの課題案をもとに議論し、インテリア、建築、都市・ランドスケープの多角的なアプローチが考えられる課題の採用を決定した。併せてワークショップのスケジュール、進め方、詳細な課題内容等も検討した。

第2段階では、ワークショップの開始に先立ち、吉良教授が参加希望学生に対し課題説明を行った。課題説明は、日本時間2010年12月16日午後6時から、インターネットテレビ電話であるSkypeでアムステルダムの吉良教授と本学環境・建築デザイン学科講義室をつないで行った。

この課題説明では、吉良教授がパワーポイントやビデオを用い計画地やその周辺、課題内容、進め方などを説明し、その後、学生と質疑応答を行った。さらにワークショップ開催までの期間を利用し、吉良教授が学科ブログにおいて、計画地周辺の状況、博物館館長のインタビュー、アムステルダム市の歴史などに関する情報を提供した。またこの期間に3名で構成される9チームの編成、全チーム合同での敷地周辺模型の作成、各チームの名称とモットーの決定を行った。チームの編成は、学年や興味ある分野ができるだけ混合されるように配慮して行った。

第3段階では、7日間にわたるワークショップを実施した。初日のチーム自己紹介、2日間のチーム作業によるプロジェクトの目標とプログラムの検討、中間発表会、4日間のチーム作業によるデザイン提案の作成、最終発表会の順でワークショップは進められた。ワークショップ期間中は吉良教授に加え、本学卒業生で吉良森子事務所に勤務経験のある松田安代氏もアシスタントとして参加した。中間発表会には、課題である博物館のエクステンション計画を実際に担当している建築家フェリックス・クラウス氏²⁾がゲストとして参加し、全チームの提案に対する詳細な講評を行った。最終発表会には、吉良教授、松田氏、本学の学部・大学院の教員が参加した。各チームによるプレゼンテーションの後、吉良教授を中心として、「ビジョン」「デザイン」「問題解決」「都市との対話」の視点から、学生と質疑応答を行った。最終発表会後には、吉良教授から最優秀賞である吉良森子賞、アムステルダム賞、特別賞の各賞が優秀チームに対して贈られた。

第4段階では、各チームがワークショップでの提案内容をA3シート2枚にまとめて提出した。

4) 国際教育プログラムの構築と実施方法に関する考察

「吉良森子と都市を考える」での経験をもとに、国際教育プログラムの構築と実施方法に関する考察を以下にまとめる。

① ワorkshopにおける適切な課題設定の重要性

本ワークショップが大きな成功を収めた要因として、課題設定の成功が挙げられる。計画対象地において改修ある

いは新築される建築の主要な役割は、路地を隔てて隣接する博物館の機能を補完すること。したがって提案には、デザインする建築自体が主役となるのではなく、隣接する博物館を補完する建築の役割や、計画地周辺の路地や運河との関係から導き出される建築の在り方が求められる。この課題設定は、敷地内だけで建築を考え、いわゆる「作品」としての建築を提案しがちな学生に、周囲に対して貢献する建築の在り方を考える貴重な機会を与えた。

② 詳細な講評を通して一人の建築家の視点を学ぶ重要性

本ワークショップにおいては、実際に計画中のプロジェクトを課題として設定し、プロジェクトを実際に担当している建築家のクラウス氏を中間発表会に招聘した。中間発表会では、全てのチームの提案に対してクラウス氏ひとりが詳細な講評を行った。また、全チームが発表を終えた後、クラウス氏が現在進行中の計画案の内容や、現行案に至るまでの紆余曲折などを、実際のスケッチや図面を示しながら説明した。この中間発表会は、一人の建築家の視点を実際のプロジェクトを通して学ぶ機会を学生に与えるとともに、実際のプロジェクトにおける様々な計画条件による制約を学生が学ぶよい機会となった。また、最終発表会でも、本学の教員は極力発言を控え、主担当である吉良教授が中心となって様々なコメントや質疑を行った。この最終発表会も学生にとっては一人の建築家の視点を様々な角度から学ぶ貴重な機会となった。



図3) 中間発表会に参加したフェリックス・クラウス氏



図4) 吉良森子客員教授を中心とした最終発表会の様子



図5) 最終発表会終了後の参加学生・教員の集合写真

③ 国際教育プログラムにおけるインターネット活用の可能性

本ワークショップにおいては、ワークショップを担当する吉良教授がオランダのアムステルダム在住であるため、ワークショップ開催前に必要な準備の多くは、Eメールやインターネットテレビ電話を利用して行った。中でもインターネットテレビ電話である Skype を利用した吉良教授による課題の出題は、ユビキタス教育の可能性を試す貴重な試みであった。参加学生はアムステルダムにいる吉良教授から臨場感のある課題説明を受けることができ、日本に居ながらにしてヨーロッパのプロジェクトに関われる興奮を味わえたと言える。インターネットを活用したコミュニケーション手法は、日本における今後の国際教育プログラムの実施方法の大きな可能性を示していると言える。



図6) 吉良教授による Skype を利用した課題出題風景

④ グループワークへの参加の仕方を学ぶ重要性

本ワークショップに限らず、ワークショップは学生にと

ってグループ作業を通して、様々な意見を交換する貴重な機会を提供する。特に本ワークショップにおいては、学部2年生から博士後期課程1年生までの幅広い年齢層、かつインテリア、建築、都市・ランドスケープなど興味の対象の異なる学生達が混合したチームを編成し、グループ作業を行ったことで、普段の大学での実習では経験することのできない多角的な視点から議論を行うことができた。このようなグループ作業においては、リーダーシップや、自己主張と協調性のバランスが求められ、これらの能力を日頃の教育において育成することは、グローバル化の進行する現在、ますます重要になっていくと考えられる。

5) まとめ

アムステルダム在住の吉良森子客員教授によるワークショップは今回が初めての試みであったが、その準備から実施、フォローアップまでの一連のプロセスを通して、参加した学生ばかりではなく教員も多くを経験し学ぶことができ、実り多い試みであった。特に普段の実習では実現の難しい海外の計画地を課題としたこと、インターネットを駆使して海外とリアルタイムでコミュニケーションを行ったこと、一人の海外建築家によって全ての講評を行ったことは、日本人だけの参加者で日本に居ながらにして、国際的教育を受けるひとつの可能性を提示したと言える。今後も海外との協力による国際教育プログラムの実施方法とともに、日本国内における国際的な教育プログラムの構築方法を探究してゆきたい。

註

- 1) 学部2年生5名、3年生19名、大学院1年生2名、博士後期課程1年生1名
- 2) クラウス氏は、チューリヒにあるスイス連邦工科大学での教育経験もある。